

## 『命の光を持つ人となる』ヨハネ8:12

8:12 イエスは、また人々に語ってこう言われた、「わたしは、世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。

### ●序論

先週は、姦淫の現場で捕まえられ、イエスさまの前に連れてこられた女性を巡る出来事を見ました。

その姦淫の女性は、糾弾され罰せられるために人々の中に引きずり出されました。

しかし、事態は一転。彼女を罰する者は一人もいなくなった。

イエスさまの一言「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」との言葉を聞いてのち、その罰してやろうとしていた人たちは一人一人そこを去って行ってしまったとあります。

イエスさまのもとに連れ出された時、彼女は罰せられなかったのです。

ここまでなら、ひとりの罪ある女性が罰を免れただけの物語ということで終わってしまいます。しかしイエスさまのところに、”残された”とあるこの女性の物語は、そこで終わりませんでした。彼女に向けて…

8:11 …イエスは言われた、「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」。

この女性は赦しの言葉を聞いたのです。

さて、今年の私たちの教会の標語を『御言葉を経験しよう』挙げております。

あの女性は、そういうイエスさまの御言葉を経験したのです。

あの女性が置かれたさばきの場は、本当に辛い孤独な場所で、恐れに満ちたところであったことと思います。

…”しかし、そこにイエスさまがいて下さった”、それが彼女が経験した「違い」だったのです。

そうしてその後、イエスさまはその宮にいる人たちに、再び語り始められました。

それが今日の御言葉です。

8:12 イエスは、また人々に語ってこう言われた、「わたしは、世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。

### ●本論

#### I. わたしに向けられたイエスさまの言葉

ヨハネによる福音書の特徴は、イエスさまが、「わたしは〇〇である」という表現をもってご自身をあらわしているところが多い事です。

イエスさまは、そのところどころで人々の目に、耳に、ご自身を示して「わたしは〇〇です」と、人々にとってかけがえのない存在として示しておられるのです。

さて、とりわけイエスさまの言葉を巡っては、いろいろな反応や応答が見られます。

- ①心から歓迎して受け入れられる
- ②聞いていられないと拒絶される
- ③わからない
- ④興味が無い…などなど。

律法学者やパリサイ派の人たち、また民の長老たちは、その言葉にいらだち、耳をふさぎ、また殺意さえ抱くようになっていました。

そんな中でイエスさまはご自身を示される。

それは独りごとでもなく、ただの自己主張でもありません。

「人々に向けて語られた」とある通りです。

そして今を生きるわたしたちにもその言葉は向けられている、そういう言葉なのです。

## Ⅱ. わたしたちの救いとなる言葉

「わたしは、世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことができなく、命の光をもつであろう」。

「世」というのは、まぎれもなくわたしたちが生きるこの世でありこの時代です。

イエスさまの当時であれば、ローマ帝国の支配下にあって苦しんでいた時代。

わたしたちの時代を見渡せば、あちらこちらで争いがあり、悩みがあり、被災者の悲しみがあり、政治的・宗教的な迫害の中で難民になっている人々があり、ときには、自分自身の罪や過ちで、その裁きのどん底に置かれ苦しみを経験する。そのいずれもがわたしたちが身近に接している世界がこの世です。

いずれにせよ、そこで経験する闇が深く、悩みの底が見えないほどますます苦しみが増すような私たちに向けて、イエスさまはご自身を指し示されます。

「わたしは世の光です」そして、「わたしに従って来るものは、やみのうちを歩くことがない」と言われるのです。

実際にこの福音書の記者ヨハネは、あの姦淫の女性への赦し送り出す言葉の直後にこのイエスさまの言葉を取り上げて記しています。

ここにイエスさまのことばの真実があります。

忘れてはならないのは、あの女性は連れてきた人たちがよほど悪質な人たちで、無実の彼女をイエスさまの前に連れてきたものではありません。

あの女性は明らかに罪を犯していました。律法に照らすなら本来は罰せられてしかるべき罪です。その自分の罪がもたらしたどん底の闇の中で、光であるイエスさまとの出会いを果たした、というできごとが彼女の体験でした。。

そこで、彼女は、イエスさまの言葉を体験したのです。

:11…「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」。

この言葉を通して、実際の罪の赦しを経験し、そしてその赦されいてることの奇跡に立って、新しい人生の歩みに目を向けることができたのではないのでしょうか。

希望をも知ることができたのではないのでしょうか。

さて、イエスさまはこの女性をただ何もなく赦したというわけではありません。

福音によれば、この女性の罪をも御自身に引き受けてくださった。それがあの十字架の苦しみが示す証しです。

だから、今日お読みしているわたしたちに向けられているイエスさまの言葉は、この世にあるわたしたちにとっても、救いとなる言葉であることを覚えていただきたいのです。

### Ⅲ. わたしたちの歩みを導く言葉

イエスさまはわたしたちに向かい「わたしは世の光である。わたしに従って来るものは、闇の内を歩くことがなく、命の光を持つ」と訴えかけてくださっています。

「闇の中を歩くことがなく、命の光を持つ」とはどんなことでしょうか？

まず確かに、御自身を救いそのもの、祝福そのもの、光そのものとして語るイエスさまの存在は、わたしたちにとって大きな希望となり、慰めとなります。

わたしは彼女のその後の生涯を想像して、先週こんな風に申し上げました。

そこにはどれだけ立派な生涯を歩む人になったか…というのではありません。

むしろ、どれほどキリストの愛を頼りとして、経験して生きたかの生涯を紡いでいく、それが続きとなったでしょう。

そこではつまづくがあるかもしれない。失敗することもあるでしょう。うまくいかないこと、弱く頼りない自分を経験して、…それでもなおイエスさまに頼ることが、自分の命綱となるような生きざまに入ったのであろうと。

ヨハネの福音書の1章で、イエス様ご自身を光と表現してこんな風に記してありました。

1:5 光はやみの中に輝いている。そしてやみはこれに勝たなかった。

わたしたちの周囲の闇は、依然として、悩みや困難を含むものとしてあります。わたしたちの目は依然暗闇を見るでしょう。

しかし、わたしたちは、その暗闇の中ではなく、そこで光をもって主を頼りとして生きることを覚えたのです。わたしを愛してくださっている方に頼って生きる。それが「いのちの光を持つ」信仰者の生きざまであるということです。

イエスさまは十字架にかかれる前、弟子たちのためにとりなし祈られました。

17:15 わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることです。

わたしたちは、このイエスさまのとりなしの祈りのお答えである、神さまの守りの中で生かされていることを覚えていただきたいのです。

覚えていたいこと…

わたしたちの信仰は、自分自身が強くなり、大きく見せるためのものではありません。

また、わたしたちの信仰は、その闇を無くすためにあるのでもありません。

その闇の中でさえも、命の光を持つ者として、神さまを頼り切って生き、神さまのみわざを待ち望み、またそのただ中で主の愛を証しする者とされるのです。

### ●さいごに

「わたしは世の光である」と、御自身を大胆にあらわされたイエスさまのその言葉の積み重ねが、当時のユダヤ人たちの反発と敵意、殺意をかきたて、やがて十字架で殺されてしまいます。

光であるはずのイエスさまが、この世の暗闇に飲み込まれたかのように見えた出来事です。ああこの人はこれでお終いだっただという闇に覆われたかのように見えまし

た。

しかし、神だけが知っていました。この出来事がすべて私たちすべての人の罪を引き受けての贖いの死であったことを。そしてこの後があること。

イエスさまは、三日目にその葬られた墓からよみがえり、死に勝利を納められました。そうしてこの世のどんな闇にもかすめ奪われることのないご自身の命の光を示されたのです。

多くの人がいつの間にか思い込んでいること、闇は光を覆い、命は死で終わると。けれども聖書は、イエス・キリストによる全く逆を証しします。

「闇は光に勝てなかった」と語り、「死は（いのちの）勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。」と語るのです。

どんな闇にも打ち勝つお方をわたしたちは、自分の主と仰ぎ、頼りとしている。どんな闇の中でもこの方の命の光を頼りに生きることができる。

これがわたしたちに与えられた信仰の生涯であり、また御言葉を経験する者の歩みです。

だから私たちは今日のイエスさまの御言葉に「アーメン」と応えて生きることができるのです。

8:12 イエスは、また人々に語ってこう言われた、「わたしは、世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。